



日本の保育とエ・エル・ハウ女史

高野勝夫

唯一の保育専門指導者

一八八六年（明一九）神戸基督教教会（現在の日本基督教団神戸教会）の進歩的な婦人会の有志の間に、キリスト教幼稚園設立の計画がたてられ、その要請に応じて献身したのは、エ・エル・ハウ女史（Miss Annie Lyon Howe）であった。女史は一八八七年（明二〇）末にアメリカン・ボードの教育宣教師として来日し、婦人会の幼稚園設立に参与した。

しかし、女史は日本の保育界の将来のために保育の養成がより急務であると信じ、幼稚園と同時に保育伝習所の創設に取り掛かった。そして、一八八九年（明二二）十月に頌栄保育伝習所を、続いて十一月に頌栄幼稚園を開設した。

女史は一八五二年アメリカ、マサチューセッツ州ボストン郊外ブルックラインに生まれ、両親は敬虔な開拓者であった。彼女は

一八六九年ロックフォード女子専門学校（Rockford Female Seminary）現在のロックフォード大学）の二年間の音楽課程をおえ、さらに、一八七八年シカゴ・フリーベル協会保育伝習学校（Chicago Froebel Association-Kindergarten Training School）の二年間の課程を卒業した。

そして、卒業後、シカゴで実際に幼稚園教育に九年従事し、三十五歳のときに来日した。それから、一九二七年（昭二）に引退帰国するまで四十年間、その間二年半、一時退任帰国したが、生涯の大半を日本の保育のために献げたのであった。

以上のように、ハウ女史は保育と音楽の専門家で、しかも、理論と實際を兼ね備えた当時の日本として数少ない得難い指導者であった。その上に、女史は非常に創造性の豊かな、また実行力に富んだ人物であった。優れた卓見と構想をもって、積極的に保育と保育者養成に励んだ。

だから、日本の保育史、特にその初、中期におけるハウ女史の貢献には、まことに著しいものがあつた。その当時の日本の保育界では、女史ほど学識経験の豊かな有能な指導者は他に見当たらなかつた。唯一の専門指導者といつて差し支えがない。それだけに、その貢献は大きかつた。次に、女史の四つの貢献について、概略を述べてみよう。

保育者養成の先駆者

ハウ女史の創設した頌栄保母伝習所は、日本における最初の保育者養成機関ではなかつた。すでに、それに先立つこと十一年前に、一八七八年（明一一）に東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）に保母練習科が付設されていた。

また、キリスト教主義の保育者養成機関としても、頌栄は最初のものではなかつた。一八八四年（明一七）東京の桜井女学校（現在の女子学院）に一年課程の幼稚保育科が開設されていた。

これはアメリカの宣教師ミス・ミリケンが創めたもので、彼女もハウ女史と同じく本国で保育の専門教育をうけた人であつた。しかし、残念なことには、この学校は、その教科内容は十分に明らかでなく、また、一八九六年（明二九）ごろには廃止され、現在記録も残っていない。

それで、その後の保育者養成のバタンとなつた東京女子師範の保母練習科と頌栄保母伝習所と比較してみよう。

一、東京女師の場合、保育者養成は第二義的であつたのに對し、頌栄はこれを第一義的本格的に考へていた。

東京女師の保母練習科は一八七八年（明一一）に開設したが、一、二名の応募者しかなく、翌年再募集して、十一名の入学者が得られ発足した。ところが、それはわずか一年で翌年廃止された。というのは、小学校教員養成のための本科生に同時に保育学を履修させて、二つの養成を兼ねる安易な方策が考へられたからであつた。この状態は、一八九六年（明二九）まで続いた。

これに對し、頌栄では、ハウ女史が保育者は小学校教師と違つた独自のもので、特別な専門教育が必要であるとの考へにたつて、本格的な教育を施した。

二、頌栄は東京女師にくらべ保育者養成に三倍の時間をかけた。修業年限は東京女師の場合是一年だったが、頌栄は二年であつた。また、週の授業時間数は東京女師は二十三時間に對し、頌栄はその一・五倍の三十八時間であつた。すなわち、頌栄は東京女師の三倍の時間をかけて保育者を養成したと言える。

三、主体となつた教師は、東京女師の場合、松野クララ夫人で、この人は家庭をもつていたため、学生や園児との接触はそれ

ほど深くなかったのに対し、頌栄の場合はハウ女史で、彼女は独身で、その全生活を頌栄にささげたので、その感化影響は大きかった。

松野クララ夫人は農商務省の役人松野禎氏と国際結婚したドイツ人で、本国でフレーベル直伝の保育を学んだ人であった。しかし、夫人は幼稚園で週一回遊戯の伴奏をしただけであり、また、保母練習科では恩物の講義をしたが、これも休講が多かった。

四、教科内容においては、頌栄の方は東京女師にくらべ、音楽とフレーベルの教育哲学と、また、そのよって来た聖書の教育に力点をおいた。

頌栄は週に器楽は七時間、唱歌は四時間であったのに対し、女師は遊戯ともに一、二時間に過ぎなかった。それから、いずれも保育学に重きをおいたが、女師の方はフレーベルの実技的な面に力点をおいたのに対し、頌栄はその教育哲学、精神、人物を学ぶことに中心をおいた。

以上のようにハウ女史の頌栄保母伝習所における保育者養成は充実した独自性を持ったものといえる。この他、ハウ女史は一八九三年（明二六）に、さらに二年の高等科を増設した。これは、あまりに現実を飛躍しすぎて、五名の卒業生を送っただけで、成功しなかったが、今日から見ると、非常な卓見である。また、女

史は三年制課程の構想もいただき、卒業した者にもう一年頌栄幼稚園に残り、実習と研修をするようにすすめた。これに応ずる者もあつた。

今日、保育者の養成は二年制課程では不十分で、四年制課程でなければならぬ、それがすぐ実現困難なら、せめて三年でもと言われ、保育者の質の向上が求められているが、ハウ女史は八十年も前に、これと同じ構想をもち、これを実行に移した偉大な先覚者であり先駆者であつた。

関西保育界、キリスト教保育界の指導者

ハウ女史は先述のように保育の理論と實際を兼ね備えた、当時の日本として得難い保育の専門家であつた。そのため、各方面から指導を依頼された。一八九七年（明三十）神戸市内四園の保母たちが神戸保母会を組織し、ハウ女史に指導を仰ぎ、月一回、研究会を開くことにした。また女史は京都市保母会にも頼まれ、よくこれを指導した。

一八九七年（明三十）京都市保母会が推進の中心となり、京阪神連合保母会が結成された。これには頌栄がイニシアティブをとり、ハウ女史や和久山女史が指導の中心であつた。しかし、一八九〇一年（明三四）宗教上の理由から神戸保母会は連合会より脱

退し、さらに神戸保母会も翌年解散した。

それ以来、ハウ女史はキリスト教保育界にその指導を限定した。そして一九〇六年(明三九)女史の提唱でJKU(The Kindergarten Union of Japan)が生まれた。JKUはわが国のキリスト教幼稚園と保育者養成校の連合体で、キリスト教保育の指導と推進と開拓に大きな役割を果たした。後に女史の建議で各地に支部ができ、やがて今日のキリスト教保育連盟へと発展していった。

フレーベリズムの紹介導入者

わが国の初期の保育はフレーベル万能であった。しかし、これは恩物を中心とした、フレーベルの技術的実的な面に力を入れたものであった。ハウ女史はフレーベルの方法も忠実にとり入れたが、それよりむしろ、その教育精神、教育哲学を生かすことに務めた。それは何よりも、その訳業において見ることが出来る。

一八九三年(明二六)女史は保育者養成のため「保育学初歩」を著した。これは三分の二ぐらいは恩物理論で、後は手芸と遊戯について記したものである。また、一九〇三年(明三六)にウィギンス・スミス著「幼稚園原理と実習」を訳した。この本はフレーベリズムを体験の中に充分消化し、その原理と実際を忠実に紹

介した名著である。このようにハウ女史はフレーベルの実際的な面の紹介を計った。

しかし、他方において、フレーベルの二大著作「人の教育」「母の遊戯及育兒歌」とフレイク著「フレーベル伝」を訳して、フレーベルの人物と思想と精神を理解させるように務めた。「人の教育」と「母の遊戯及育兒歌」は一般の保育界にもよく読まれ、四版五版と版を重ねた。

以上のようにハウ女史は著作を通して、フレーベルの保育の方法ばかりでなく、むしろその精神を正しく、わが国に導入紹介した点において大きな功績のあった人である。

幼児の教育、しつけに対する変革者

日本の家庭には他国に見ない一つの伝統的な特色がある。それは母子密着、過保護ということである。これは今日、核家族化して母親中心となり、なお一層甚だしくなっている。いわゆる教育ママに見られるような干渉、期待型の親が多く、そのため主体性を欠いたご都合主義の子が多い。

ハウ女史は、このしつけの欠陥を正そうと、その保育の目標の一つに「自分のことは自分でするセルフ・ディペンデンス(自己依頼)の観念」の涵養をかかげ、その徹底を計った。

具体的には、たとえば、ころんで泣き叫び、起こしてくれる者の助けを待っている子どもを、決してなだめて起こしてはならないと厳しく戒めたり、鼻水をたらしている子の前掛にハンカチをつけさせ、自分でふきとらせることを励行させたりした。当時、頌栄幼稚園にはエリートのな家庭の子が多く、女中が付き添ったり、人力車で送られてきたりした子があつたが、付き添いを決して構内に入れなかつた。そのため、泣きわめく子はハウ女史の室に入れて泣き止むまで放置しておいた。これらのことは、ハウ女史がいかに過保護を戒め依存性を正し自主性をもつた子の育成を計つたかを示すよい例である。

次に、ハウ女史は世界的に連帯性をもつた平和友好、万民同胞の精神を愛する子を旨とした。当時、欧化主義への反動から天皇中心の国家主義的体制が着々と強化されつつあつた時であつた。ハウ女史は、この時流に逆らい、大胆にも、幼き魂に国際友好、平和愛好の精神を植えつけようと努力した。

女史は軍国主義に強く反対する立場から、よく父兄や保母に武器をまねた玩具を子どもに与えないように戒めた。また、保母がマーチに軍隊行進曲を弾くと顔をしかめた。

平和友好の精神を養なおうとする女史の方針が遺憾なく發揮されたのは、世界第一次大戦の時であつた。戦争の最中、保育の主

題に万民同胞、平和友好を目指したものをかかげたこともあつた。特に一九一八年（大七）休戦となり、一九二二年（大一一）ワシントン条約が結ばれた時に、その頂点に達した。

休戦の秋の十一月の感謝祭を、平和成立祝賀会と兼ねて行った。またワシントン会議が開かれている時には、女史は早くから、この会議のことを保育にとり上げ、子どもたちに参加五大国の国旗を作らせたり、また会議の目的を教えたりした。このような女史の平和教育の反響、成果は大きかつた。ある四歳の園児が自宅である日、突然「軍艦なんかいらぬ。軍艦を造らなければ、家も学校も道もたくさんできるのに」と言つて、家の者を驚かせたといふことである。

以上のようなハウ女史の幼児教育のねらいは、キリスト教の人間観より出たものであつた。聖書によれば人間は「神の像」をもつた存在、すなわち人格をもつた者である。人格とは主体性と連帯性をもつた存在、自由と愛に生きる者である。ハウ女史は、その保育において、この人間観にたつて、一方においては主体的に自由に生きる自主独立性に富んだ子を目指すとともに、他方において、世界的に連帯性をもつた平和友好を愛する子の育成をはかつたのである。

（頌栄女子短大）